

7月13日 5日目



シドニーへ

朝の4時に出発し、夕方シドニーに到着。疲れが少しずつたまっていきますが、これから公式巡礼の開始です。

担当：ジェームス博

7月14日 6日目

今日はA班とB班と合流し、シドニーでWYD手続きや市内観光に出かけた一日でした。(B日程9日間)



7月15日 7日目



各自ホームステイ先を出て A 日程組・B 日程組それぞれで集合。大会期間中、日本巡礼団のホスト教会となった **St Brigid's** 教会へと向かった。

この日は大会初日ということで結団式から始まり、基本グループ決めなどが行われた。昼食を取った後、各グループごとに **Barangaroo** へと向かった。

ここでは世界中の青年・修道者達が集い毎日様々なイベントが行われた。この日はシドニー大司教ジョージ・ベル枢機卿による開会ミサが催された。ミサが終わる頃には夜に差し掛かっており、非常に冷え込みが激しかった。夕食は電子レンジで温めたカレーが配給されたが、並んでから受け取るまでに2時間近く待ったグループもあったそうである。

7月16日 8日目



前日同様、日本巡礼団は **St Brigid's** 教会へ集合。この日から3日間、司教様方によるカテケージスが行われた。この日は鹿児島教区の郡山司教

様がイマキュレー・イリバギザという女性の書いた「生かされて」というアフリカの民族紛争を通じた自叙伝を引き合いに話された。（※カテケーシスの詳細は別途後述します。）その後、各自で話された内容についての分かち合いを行いミサに与った。

昼食を取ってすぐに午後行われるアジアニュースギャザリング（AYG）というアジア地域の青年の交流会に向けて移動した。場所はシドニー五輪（2000年）で使用された大きな競技場内である。各国何らかの出し物をするようになっており、日本は炭坑節と聖霊を融合させた聖霊音頭というのを踊った。

受けは比較的良かった。炭坑節は世界でも通用するようである。他国の出し物は歌・舞・バンド・ダンス・ミュージカルなどがあり、言葉を超えた交流が図られた。モンゴル・東ティモールなどから来ている青年もおり、アジアと言えどもいろいろな点で多様性を持っていることを実感し、同時に信仰という一点では皆共通しているということに深い喜びを覚えた。

7月17日 9日目



この日のカテケーシスは大阪教区の松浦司教様が担当された。司教様はご自身の体験と重ね、聖霊という存在を私たちがどのように解釈することができるかということをやさしく話された。カテケーシスの後には一人の青年による信仰体験が話され、大変感銘深いものだったと思う。

午後からは **Barangaroo** に移動し、世界中の青年たちと共に教皇歓迎式典に参加した。教皇様は豪華客船で来航され、周囲には沢山の **SP 機**・**SP**

艇がいるなど少し物々しい雰囲気だったが青年たちの熱狂振りは凄かった。教皇様は英語はじめ 10 カ国語ほどで青年に挨拶され、各国自分たちの公用語が話されると歓声が上がった。

夕食を取った後、希望者は用意されているアクティビティーへと参加した。日本巡礼団は主にテゼの祈りやオペラハウス内で行われた聖体礼拝、聖マリア大聖堂見学などに参加していた。

7月18日 10日目



3日目のカテケージスは長崎教区の高見大司教様によって行われた。大司教様は学問的な側面も交え聖書から見える聖霊像とはどのようなものかということを中心に話された。その後巡礼団唯一の神学生の方から自身の信仰体験についてのお話があり、これもやはり感銘深いものだった。

昼食後に広い丘へと移動し、そこで許しの秘蹟が行われた。司教様の「自分の罪に固執して閉じこもってしまうのではなく、自分以外の全ての人もこの秘蹟によって許されるよう願う気持ちで与ってください」という言葉が印象的だった。この日も **Barangaroo** へ移動し、十字架の道行きが行われた。巨大なスクリーンがいくつも用意され、プロの俳優がシドニーを舞台に各留の様子を再現する様子が映し出された。大会中はこのようにたくさんのプロの演出家達の協力が見られ、**WYD** という大会が高く位置付けられていることを感じた。

7月19日 11日目



この日も朝に St Brigid's 教会に集合してミサに与った。この日で St Brigid's 教会を借りるのは最後だったが、教会の信者の方々が日本巡礼団のために毎日 100 人分もの昼食を用意してくださり私たちを暖かく迎え入れてくれたことに大きな感謝を覚えた。日本巡礼団からはメッセージと折り鶴を教区へ贈った。

そして教皇ミサが行われるランドウィック競馬場に向けてハーバブリッジという名所から徒歩巡礼が開始された。距離はおよそ 6 km ほどだったが大変混雑しているために実際にはそれより長く感じた。競馬場に着くと決められた宿営場所に腰を下ろし、各自夜まで祈りや他国の青年と交流など思い思いの時間を過ごした。日本人は人数も少ないためか話しかけられる機会が比較的多く、皆バッジや着ているものを交換したり漢字を書いてあげたりと一生懸命コミュニケーションを図っていた。夜になると前晩の祈りが行われた。一人一人にろうそくが配られその光だけが暗闇に光っていた。とても澄んだような静けさが印象に残っている。祈りが終わると多くの日本人は寝袋に入り寝た。

7月20日 12日目

とても寒かった。競馬場なので砂も舞っており非常に厳しい朝を迎えた。大会中はハードな日程に体調を崩し病院に行った参加者もいたほどで、まさに巡礼と呼ぶにふさわしい側面も WYD は持っている。

この日は起きてすぐ朝の祈りが行われた。朝食を取るとすぐに司祭団は司祭席へと移動した。聖職者だけでも数千人が大会に参加したそうで、遠くからでもその圧倒的な数の多さを確認することができた。そして大会最